

令和 4 年 6 月 24 日現在

機関番号：62618

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02799

研究課題名(和文)近代小説100冊における外来語の研究

研究課題名(英文)A Study of Loan Words in 100 Modern Japanese Novels

研究代表者

飛田 良文(Hida, Yoshifumi)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・大学共同利用機関等の部局等・名誉所員

研究者番号：40000418

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：明治・大正・昭和期の約100年間における代表的文学作品100冊に使用された外来語を、初版本から採集し、データベースに入力した。用例文総数は約47000用例、表記別見出し語数約8500語。漢字表記・カタカナ表記・ひらがな表記・アルファベット表記の外来語と、和製外来語、外来語の略語などを、50音順に配列し、原語を記入し、大正から昭和戦中までの26作品について、作品別に配列した外来語用例集を印刷した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際化時代への対応として、日本語の中の外来語とその原語との意味の比較研究は緊急の課題である。米国のYou are smartのsmart(賢い)は、外来語のスマート(細くて格好がよい)と意味が異なる。こうした異文化接触の視点から見た外来語の語史研究は、国語辞典の編集や語源の考察といった日本語史の研究であるばかりでなく、比較文化史の性格を持ち、外国人に対する日本語教育にとっても基本となる研究である。

研究成果の概要(英文)： Foreign words used in 100 representative literary works in the 100 years of the Meiji, Taisho, and Showa periods were collected from the first edition and entered into the database. The total number of example sentences is about 47,000, and the number of headwords by notation is about 8500. Foreign words in kanji, katakana, hiragana, and alphabet, Japanese foreign words, and abbreviations for foreign words are arranged in alphabetical order, and the original words are entered. The arranged loanword example collection was printed.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語 外来語 語形変化 文学作品 外来語史

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

日本人は、室町時代にはポルトガル語・スペイン語・ラテン語・オランダ語を、江戸時代末期には欧米諸国と通商条約を結んだことにより、英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語などを学び、明治期にかけて漢学から洋学へと関心が移っていった。それぞれの時代時代での通時的実態はまだ明らかではない。

外来語研究の文献には、飛田良文編著『英米外来語の世界』1981 南雲堂に収録された飛田良文・中山典子編『外来語研究文献目録』(A) 著書の部 (B) 論文の部 (C) 新聞の部で知られるが、その後の主要なものとして次のものがある。

飛田良文編著『英米外来語の世界』南雲堂 1981

石綿敏雄『外来語と英語の谷間』秋山書店 1983

石綿敏雄『外来語の総合的研究』東京堂出版 2001

田中彦彦『外来語とは何か』鳥影社 2002

山本雄一郎『外来語と小説』広島修道大学総合研究所 2002

国立国語研究所「外来語」委員会編

『分かりやすく伝える外来語言い換え手引き』ぎょうせい 2006

小林千草『現代外来語の世界』朝倉書店 2009

橋本和佳『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ書房 2010

高野繁男『日本語になった西洋語：急増するカタカナ語』大空社 2011

陣内正敬・田中牧郎・相沢正夫編『外来語研究の新展開』おうふう 2012

高崎みどり編『大正期「中央公論」「婦人公論」の外来語研究：論と広告に見るグローバリゼーション』富山房インターナショナル 2019

亀田直己・青柳由紀江・J・M・クリスチャンセン著『和製英語事典』丸善出版 2014

### 2. 研究の目的

明治維新以降、日本は、西洋文化の制度、習慣、概念をおびただしく取り入れた。西洋の文化は、言語面において、あるものは翻訳語として、あるものは外来語として導入された。後者は、日本語に類似の概念を持つ言葉がないために、外国語の発音を日本語の発音に置き換え、漢字、カタカナ、ひらがなで表記して導入したのである。外来語史の研究は、未開拓の分野であって、分析の方法もまだ確立していない。そこで、幕末から今日に至るまでの、日本語における外来語の受入れとその定着の過程を明らかにするために、外来語のデータベースを作成し、以下の観点から考察する。

まず、外来語の導入期という観点からは、ある概念を表す外来語がどのような表記で現われたか、導入の際、その後はどのような意味で使われ始めたか、原語との意味のずれはないか、について明らかにする。

次に、外来語の定着期という観点からは、個々の語の定着過程を明らかにし、表記の変遷、意味と原語とのずれ、言葉の短縮による語形変化、省略形でない言葉の意味や用法のずれ、和製外来語の誕生と一般化、について解明する。

### 3. 研究の方法

外来語の使用例を集め、データベースを作成するのであるが、その外来語用例データベースそのものが日本では最初の試みであり、将来、日本外来語用例事典へと発展することのできるものである。

本研究は、明治以降の小説 100 冊の全数調査を行い、原語・表記・固有名詞・和製語・語構成・意味分野の観点から分析を行う。完成の暁には、外来語史研究のみならず、日本の近代化を反映するデータ集として、その意義は、極めて大きいものと考えている。

外来語の実態については、原語・表記・固有名詞・和製語・語構成・意味分野を調査し、データベースの情報として記入する。

1. 出典の刊年により、原語が移入された時期が明らかになる。それによって、オランダ語から英語への移り変わりなど、原語の推移を明らかにできる。

2. 表記が、漢字・カタカナ・ひらがなで、どのような割合で使用されているか、国定読本では、漢字表記・ひらがな表記・カタカナ表記が認められている。いつ、カタカナへ統一されているのかが明らかになる。

例えばメートルなどは、1900 年刊行徳富蘆花著『不如帰』等では「米突」、1949 年刊行石坂洋次郎著『石中先生行状記』等では「米」、1958 年刊行松本清張著『点と線』等では「メートル」の表記が見られる。

また、労働闘争の場で使用される「ストライキ」という言葉は、1926 年刊行の葉山嘉樹著『海

に生きる人々』では「ストライク」と表現されているが、1928年刊行の小林多喜二著『蟹工船』では「ストライキ」と現在の形になり、同じ言葉が別の語形で表される場合がある。

現在では「ストライク」と表記される野球用語も、原語表記は同じく strike であるが、こちらでも1900年刊行の押川春浪著『海底軍艦』では「ストライキ」と表記された例が見つかる。

3. 固有名詞は、人名・地名・作品名・組織名・商標名などに分類する。人名・地名については表記の揺れなども確認できるようにする。

4. 和製外来語は外国語を利用して、日本人が考案した新語を和製外来語と定義し、考察を行う。

例：サラリーマン アイスクャンディー バックミラー ナイター 等

5. 語構成は、純外来語 混種外来語 和製外来語へと推移していくのではないか。

例：窓ガラス 和+英 / スナップ写真 英+漢  
/ バイト アルバイト(独)の略 (和製語)

など、「外国語」を自国の言葉として咀嚼していく過程を調査する。

6. 外来語が、日本語に移入されたのは、どの時期に、どのような意味分野であったか、推移を明らかにする。

意味分野は『分類語彙表』を基準にして分類する。

#### 4. 研究成果

近代小説100冊の選定を行い、その底本を決定し、外来語の採集を始め、飛田良文・半田真由美の二人で底本を通読して、用例を採集した。100冊の小説は以下の通りである。

第1期 明治期(1868~1912)

仮名垣露文「西洋道中膝栗毛 初編~十一編」(1870) 仮名垣魯文「安愚楽鍋」(1872) 万亭心賀「新制兎美断語」(1873) 岡丈紀「江南機関西洋鑑」(1873) 山口又市郎「開化自慢」(1874) 高畠藍泉「怪化百物語」(1875) 総生寛「西洋道中膝栗毛 十二編~十五編」(1876) 松村春輔(他)「春雨文庫 初・2」(1876) 和田定節(他)「春雨文庫 三編~五編」(1878) 戸田欽堂「情海波瀾」(1880) 蛸舎蘇山「民権膝栗毛」(1882) 坂崎鳴々道人「汗血千里之駒」(1883) 菊亭春水「世路日記」(1884) 坪内逍遙「当世書生氣質」(1885) 坂崎鳴々道人「汗血千里之駒 / M18」(1885) 末広鉄腸「雪中梅」(1886) 嵯峨の屋おむろ「守銭奴の肚」(1886) 二葉亭四迷「浮雲」(1889) 矢野龍溪「浮城物語」(1890) 渡辺霞亭「浮世」(1891) 中村花瘦「陽炎」(1892) 福地桜痴「浮世見物」(1894) 江見水蔭、関戸浩園「女の顔切」(1895) 幸田露伴「僥倖」(1897) 巖谷小波「新知事」(1898) 押川春浪「海底軍艦」(1900) 村井弦斎「伝書鳩」(1900) 徳富蘆花「不如帰」(1901) 国木田独步「武蔵野」(1902) 尾崎紅葉「金色夜叉」(1903) 小杉天外「魔風恋風」(1904) 夏目漱石「吾輩は猫である」(1906) 伊藤左千夫「野菊の墓」(1906) 島崎藤村「春」(1908) 田山花袋「田舎教師」(1909) 正宗白鳥「泥人形」(1911) 岩野泡鳴「癡展」(1912) 長塚節「土」(1912)

第2期 大正から昭和戦中期(1912~1945)

志賀直哉「留女」(1913) 徳田秋声「あらくれ」(1915) 森鷗外「雁」(1915) 里見弴「善心悪心」(1916) 永井荷風「腕くらべ」(1917) 有島武郎「生れ出る悩み」(1918) 久保万太郎「恋の日」(1919) 宮嶋資夫「恨なき殺人」(1921) 室生犀星「性に眼覚める頃」(1921) 武者小路実篤「或る男」(1923) 葉山嘉樹「海に生きる人々」(1926) 斎藤紅緑「あゝ玉杯に花うけて」(1928) 宮本百合子「伸子」(1928) 小林多喜二「蟹工船」(1929) 徳永直「太陽のない街」(1929) 川端康成「浅草紅団」(1930) 横光利一「機械」(1930) 梶井基次郎「檸檬」(1931) 海野十三「赤外線男」(1933) 三上於菟吉「幽霊賊」(1935) 高見順「故旧忘れ得べき」(1936) 堀辰雄「風立ちぬ」(1938) 宇野千代「恋の手紙」(1939) 山本有三「新編路傍の石」(1941) 獅子文六「海軍」(1943) 火野葦兵「麦と兵隊」(1943) 日吉早苗「お母ちゃん」(1944)

第3期 昭和戦後期(1945~1989)

石川淳「黄金伝説」(1946) 田村泰次郎「肉体の門」(1947) 太宰治「斜陽」(1947) 坂口安吾「白痴」(1948) 谷崎潤一郎「細雪」(1948) 石坂洋次郎「石中先生行状記」(1949) 大岡昇平「武蔵野夫人」(1951) 林芙美子「浮雲」(1951) 井上靖「仔犬と香水瓶」(1952) 阿川弘之「雲の墓標」(1955) 内田百閒「第三阿房列車」(1956) 三島由紀夫「美徳のよるめき」(1957) 松本清張「点と線」(1958) 遠藤周作「海と毒薬」(1960) 福永武彦「廃市」(1960) 北杜夫「遙かな国遠い国」(1961) 結城昌治「あるフィルムの背景」(1963) 井伏鱒二「黒い雨」(1965) 小松左京「模型の時代」(1968) 佐藤愛子「戦いすんで日が暮れて」(1969) 渡辺淳一「光と影」(1970) 高野悦子「二十歳の原点」(1971) 野坂昭如「死の器」(1973) 安部公房「箱男」(1973) 加賀乙彦「異郷」(1974) 井上ひさし「青葉繁れる」(1975) 島尾敏雄「日の移ろい」(1976) 吉行淳之介「夕暮れまで」(1978) 筒井康隆「大いなる助走」(1979) 堀田あけみ「1980 アイコ十六歳」(1981) 向田邦子「あ・うん」(1981) 村上春樹「羊をめぐる冒険」(1983) 阿刀田高「誰かに似た人」(1984) 有吉佐和子「恍惚の人」(1986) 椎名誠「新橋烏森口青春篇」(1987)

第二期を大正から昭和戦中までとしたのは、年号で分けした場合、大正期の作品数が極端に少なくなるためと、戦後になり、学校教育において新かな遣いや新字の使用が始まったことによる。また作品の時代背景も、戦後になり大きく変わった事も勘案した。ただし、小説家にとっては1950年代後半まで旧かな旧漢字の使用者が多かった。

これらの用例を全数採集し、入力した。その上で、原語つづり、語種（固有名詞・和製語）、語構成、意味分野など、考察に必要な情報を調査し入力した。判断のできない項目は、その旨を記入し、判断は後日に記することとした。たまたま新型コロナウイルス感染症の流行と時期が重なり、図書館の利用が不可能な場合があり、分析は断念せざるを得なかった。

ただし、用例集作成に関わる内容の論文を執筆したので報告しておく。

飛田良文「春のや主人ノ二葉亭四迷合作『新編浮雲 上巻』の書誌について」(日本近代文学館年誌) 2020年3月 15~30頁

飛田良文「英学資料による語彙研究の視点」(シリーズ日本語の語彙4 近世の語彙) 2020年8月 朝倉書店 151~169頁

飛田良文「ジャパnという語の由来」(銀座百点 No.790) 2020年9月 29~31頁  
の三論文を発表した。

「新編浮雲」の書誌は、近代文学館編集の名著復刻全集の復刻本が、初版の一刷とされているが、二刷なのではないかと疑問を呈したものである。奥付の日付が同じでも、同一版とは限らないことを指摘した。

は、近世の英学資料を中心に紹介したもので、本研究の前時代を調査した。

は、英国公使オルコックが、オランダ語の発音ヤーパンを、ジャパnと発音するようになったのは、イギリス式にJapanを発音したからだという記述を紹介したものである。

近代小説 100冊の外来語調査と用例採集はほぼ完了したが、分析のための情報調査は容易ではない。外来語か外国語か、原語はどここの国かなど判断に困難なものがある。特に原語に関しては、同じ意味や物であっても日本にもたらした国(あるいは経由地)によって、日本では違う発音や、異なる意味として認識される例も見られる。辞書によっても扱いが異なる場合があり、思った以上に時間がかかることがわかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 飛田良文	4. 巻 15
2. 論文標題 春のや主人 / 二葉亭四迷合作『新編浮雲 上巻』の書誌について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本近代文学館年誌	6. 最初と最後の頁 15-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 飛田良文, 佐藤武義, 小野正弘, 平林香織, 矢島正浩, 中里理子, 園田博文, 鶴橋俊宏, 広瀬満希子, 神戸和昭, 佐藤貴裕, 半田真由美, 櫻井豪人, 萩原義雄	4. 発行年 2020年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 212
3. 書名 近世の語彙 身分階層の時代	

〔産業財産権〕

〔その他〕

飛田良文「ジャパンという語の由来」（銀座百点 No.790）2020年9月 29 - 31頁
--

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	半田 真由美  (Handa Mayumi)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------